

三一新書 674

# 戦争と人間

12

劫火の狩人 第四部

五味川純平 著



三一書房

## 五味川純平

ご み かわ じゆん ぺい

1916年 満洲に生まれる  
東京外語英文科卒  
満洲にて就職，応召  
1948年 引揚げ  
著 書 『人間の條件』『自由との契約』  
『歴史の実験』『孤独の賭け』  
『アスファルト・ジャングル』  
いずれも三一新書  
現住所 東京都渋谷区神宮前1-15-3

戦争と人間 12

定価 300 円

1969 年 11 月 15 日 第1版第1刷発行

著 者 © 五味川純平  
1969 年

発行者 竹村 一

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 本間製本株式会社

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電話 東京 (291) 3131~5 番

振替 東京 84160 番

郵便番号 101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 674

戦 争 と 人 間

12

劫 火 の 狩 人

第 四 部

五 味 川 純 平 著

三 一 書 房



# 戦争と人間



劫火の狩人 第四部





一九三九年（昭和十四年）九月十六日、モスクワで、モロトフと東郷大使との間にノモンハン事件に関する停戦協定が成立した。

突然であつた。戦場の日本兵たちは最後の絶望的な総攻撃を用意していたときである。

停戦成立で、日本軍は一部の部隊をハンダガイ付近に残して、原駐地へ帰還することになった。

兵たちには深い虚脱感があつた。生き残つた喜びは、体の節々から力が抜け落ちた隙間を、容易には満さなかつた。

死んでいった者は悲惨であつた。広漠とした砂漠と草原に、界標もない国境を争って死んだのだ。軍司令部の好戦的な幕僚の野心が兵士たちを駆り立て、鉄に肉を激突させたのだ。無意味な不合理な戦闘を強いられた。そして惨敗した。生き残つた者には、惨烈な体験を透して、そのことが胸にある。彼が死に、我が生き残る。それは偶然でしかない。

数日後、ホロンバイル草原に寒波が訪れ、兵たちは草原を蔽つた霜の上に軍靴の跡を長く黒く印して後退した。数十台のトラックが薪を満載して、撤退する部隊とは反対に戦跡の方へ向つた。死体を焼くのである。兵たちは見送つて、黙々と歩いた。兵隊特有の冗談も聞かれなかつた。

生と死の激闘のさなかにいた兵たちは、だれも、戦闘が最悪の段階を迎えていたころ、八月二十三日に独ソ不可侵条約が結ばれたことを知らなかった。

その条約が締結されたために、それまで数ヵ月にわたって、日独伊三国同盟案を専らソ連を仮想敵とする防共協定強化の線に沿って進めるか、ドイツが主張するように英仏をも仮想敵に含めるかについて、会議に会議を重ねていた平沼内閣が、八月二十八日、ヨーロッパの情勢は「複雑怪奇」であるとして、情勢の急変に対応できずに瓦解したことも、当のソ連軍との死闘のなかにいた兵たちは知らなかった。

ソ連は、ミュンヘン会談——チェコスロヴァキア解体に至る間の英仏の対独宥和政策・利己的平和政策に不信を抱き、自らもまた別個の利己的平和政策を採った。ドイツと不可侵条約を結び、小国ポーランドを犠牲としてドイツの血の祭壇に捧げ、自らも犠牲の分け前を取得することによって暫定的な安全界域をひろげ、一時の平和を設定しようとしたのである。

九月一日、ドイツはポーランドに侵入を開始した。

英仏の宥和政策は破綻の限界に達し、九月三日、対独宣戦布告をした。第二次大戦のはじまりである。

ソ連は、不可侵条約を結んだドイツを信じてはいなかった。自らもポーランドに兵を進めて、不可侵条約の警戒的保持が必要であった。極東ホロンバイルの草原でいつまでも日本軍と砲火を交えることは、得策ではなかった。

こうして、ノモンハン事件の停戦協定は急速に成立したのである。

生き残った兵たちは、それらのことをまるで知らなかったといつてよい。

苦<sup>くる</sup>は、帰還部隊が通るたびに往来に跳び出して、胸をはずませながらただ一つの顔を探した。

生きているのか、死んでしまったのか、わからなかった。ある日までその人間が生きていたことを知っていたにすぎない。

とうとうその顔を隊列のなかにみつけたときには、苦は、叫び出したくなるのをこらえているうちに、気が遠くなりかけた。

声を出さなかったのは、俊介があまりにも変り果てていたからである。女のような肌をしていた俊介の代りに、痩せこけた、闘争に必要な筋肉だけが残ったような、殺伐な風貌の男が歩いていた。見かけは、すれからした百戦練磨の兵隊のようであった。やさしい心やことばをすっかり抜き取った、冷い、非情で、強靱な意志と肉体が歩いているようであった。

女給の仲間が云った。

「どうしたのよ。いたの、あんたが探してる人」

「……いたわ」

「どこに」

「あすこ……」

俊介の隊伍はもう遠ざかっていた。

「声をかければいいのに」

「いいのよ。生きてさえいれば」

「純情でいらっしゃいますこと」

女が、からかってから、呟いた。

「みんなひどい恰好してるわね。すっかりクタクタじゃない。顔見知りの兵隊さん、だれも通らないわね」

兵たちは、女たちを見かけて、いくらか笑顔を取り戻したが、女をからかう者はいなかった。これは名誉の凱旋ではなかった。緘口令を布かれた敗戦が兵たちの心を締木にかけたように締め上げていた。師団兵力の七三％に達する損耗率は、いかに事実を隠しても、兵たちの挙措動作に現われずにはいなかった。

## 2

帰還後、最初の外出日に、俊介は陸軍病院へ行った。ひょっとしたら、まだ灰山がいるかもしれぬと思つてのことである。

出しなに、人事掛准尉が外出者に注意を与えた。ノモンハンの戦況に関しては絶対に口外してはならぬ。私服憲兵の眼がどこで光っているかわからない。日本軍は敗けたのではない。敵に潰滅的な打撃を与えるための総反攻を企図しているときに停戦になったから、やむを得ず帰還したのである、というのである。

兵隊は神妙に聞いていたが、だれも信じはしなかった。

狭い病院は負傷兵で充満していた。

俊介が灰山の所属を云って尋ねると、看護婦が名簿を繰ってみて、  
「灰山浩一一等兵ね。一日ちがいで会えなくなるところでしたよ。明日後送です」  
と云った。

「助かりましたか」

「ええ。とても重症でね、死亡室行きだと思いましたが、持ち直しました。動かさなくて、後送がおくれたんです」

俊介は走るようにして病室へ行った。

びっしりと患者が詰っている病室が奇妙に鎮まり返っていた。ときおり、苦痛の呻き声を洩らす者がいるが、隣同士口をきく者がほとんどいない。衛生兵が見廻っていたが、そのせいにしては変である。

灰山は窓とは反対側の暗い壁ぎわに寝ていた。

俊介が隣の病床との間の狭い隙間に入りこむと、隣の患者が小声で云った。

「気をつけろ。あいつはただの衛生兵じゃない」

俊介は衛生兵の方を視た。兵隊の眼つきは、だれの中でも概して鋭いが、その男のは視線とは反対の方に気を配っているようなところがあった。患者たちの話を聞いてまわっているのかもしれない。

俊介は、かまわずに、

「明日後送だってね」

と、驚いている灰山を手で制して云った。

「設備のいいところで、内地送還までゆっくりしなさいよ」

「……あんたのお蔭だ」

灰山が細い手で、俊介のごつくなった手を握った。

「あのときあんたが来てくれなかったら……」

「僕が通りかからなかったとしても、だれか他の兵隊が助けたよ。助かるように出来ていたんだ。半死半生だったから、僕だってことを憶えちゃいないでしょう」

「不思議に意識だけははっきりつながっているところがあってね。……あんたは掠り傷も負わなかった？」  
俊介はうなずいた。外観は、なるほど、掠り傷一つ受けなかった。人間の内面がどれだけ傷ついたかは、自分にもわからぬことである。

「こうして見ると、あんたは不死身のようだな」

灰山が直ぐにも壊れそうな脆い笑顔を見せた。

「僕を担いで、どのくらい歩いてくれたの」

「担いだり、曳きずったりした、一晚じゅう」

「……僕は運がいいんだな」

灰山が眼を閉じて云った。

「ここへ後送されたときには、ここはたいへんだった。廊下まで担送患者でいっぱいだった。衛生兵や看護婦の手が足りなくてね、街の国防婦人会が手伝いに来てくれた。国防婦人会といったって、普通の女の人はほとんどいないんだよ。ほとんどが芸妓や女給たちだ。普通の家庭の人は、フラルキが爆撃されてから、南満へ避難したらしいんだが。……僕の世話を献身的にしてくれた人があった」

灰山が眼をあけて、穏やかに俊介を見つめた。

「苦さんだ」

俊介は黙って灰山と視線を合せていた。

「正氣に戻ったら、苦さんなんで、びっくりした。東京にいるものとばかり思っていたものだから。こんなところで会うとはね。徐州で陣内<sup>じんない</sup>に会ったときも、びっくりしたが」

「……僕を頼って新京へ出て来たのを、僕が突き放したんだ。だから、苦が身を落したとすれば、僕に責任があるわけだが……」

「そんなことは云ってなかったよ。あんたに会いたいとは云っていたが。あの子は、元々、衝動的に行動する子なんだ」

俊介のなかを、東京の家での生活の回想が突き抜けた。それは遠い昔、遠い世界でのことのように淡い色彩と幽かな匂いに包まれていた。

「……会ってくれないかな、僕の代りに」

俊介は答えなかった。

「礼を云いたい、明日後送で、その暇がない。手紙はあとで出すけれども。……紅雀という、昼間は喫茶店で夜はカフェーになる店だそうだ」

「……紅雀なら、知ってるぞ」

隣の兵隊が口を出した。

「喫茶店なんてもんじゃない。いいところさ。金さえ出せば、女といっしょに二階へでも外へでもどうぞとい

う調子だ」

「余計なことは云わんでくれ」

立っている新品の上等兵が、寝ている古参らしい上等兵をきめつけた。

灰山は、人を威圧する態度を身につけた俊介を、驚きに近い眼で見っていた。

俊介が云った。

「……これからその店を探しに行くよ。いたら、連れて来ようか」

「いや、お蔭で助かったと云ってくれればいい。昨日後送になったことにしてくれないか……」

俊介は黙ってうなずいた。

灰山がまた手を出して俊介の手を握った。

「ほんとにありがとう。あんたに助けてもらわなかったら、死ぬか捕虜になるかしていただろう。捕虜になっても、自殺する勇氣はないからね」

捕虜になれば、捕虜交換のあとで生きながら死ぬような苦しみを与えられることは、兵隊の常識になっている。日本の軍隊とはそういうところなのである。

俊介は何も云わずに、灰山の毛布と掛布を直してやった。



寒い風が黄色の土埃を卷いて街路を吹き抜けていた。

太陽は、真昼から、黄ばんだ不景気な顔をしていた。

店は直ぐにみつかった。赤や緑のペンキを塗りたくって人目を惹くようにしてあるが、低く押し潰したような二階屋である。入口の横の壁に貼紙がしてあった。

「兵隊さん 御苦勞様です

ごゆるりとお寛ろぎ下さい

心からのサービスを致します」

俊介は微かなためらいを押して、入った。

狭い店に、女が四人も五人もいた。隅のボックスで、土建屋風の男が女を相手に呑んでいた。昼間は喫茶店と  
いうのは、名ばかりのことらしい。

「兵隊さん、何にします」

女が寄って来て、俊介に云った。

「兵隊さん、ノモンハン帰りでしょ」